

## 令和5年度 上越市立有田小学校 第2回学校運営協議会 議事録

令和5年10月6日(金) 15:00~16:30 会場:有田小学校会議室

<次第> 進行:教頭

- 1 開会のあいさつ(副会長) 略
- 2 前期学校評価の説明(教頭) 資料を基に教頭が説明
- 3 前期学校評価の質疑・協議

A氏: WEB 回答に切り替えて以降、保護者の回答率が次第に下がってきており、3分の2に満たない。説明にもあったが、この回答率で傾向を評価してよいのかという心配もある。統計では、未回答分を取り出して分析することもあるが、未回答の中にも肯定的なものがあり、とりあえずは得られた回答で分析することで良いと思う。それにしても、回答率を上げていく取組はしていかななくてはならないだろう。

教頭: 紙のやり取りは保護者の皆さんも大変だろうし、先生方もデータ入力作業が大変であることから、お互いに便利になると考えて導入した WEB 回答だったが、答えていただけなくなってしまった。以前、委員から紙とのハイブリッド式の提案もあり、考えてしまう回答率ではある。

B氏: 学校に対する関心や問題意識そのものが保護者にないとすると由々しき問題で心配だ。その一方、WEB 回答の導入により、紙とは違って「いつでも回答できるから」と感じてしまい、その結果としてスルーされやすくなったのではないか? 紙ベースに戻すことも検討する段階かもしれない。

C氏: 行事に関する案内や情報に比べれば扱いが軽くなるのは保護者として分かるが、回答しやすいようにとQRコードも配付し、PTA メールでも回答をと学校はお願いしている。それにも関わらず、回答率が低いというのは非常に残念である。しかし、保護者は「今の学校に対する問題はそれほどなく、このままで良い。」と捉えているのかも知れない。それにしても、回答率がどんどん下がっていくのは残念なことだ。スマホや携帯でどこでも回答できるようにという配慮だったのだが…。

教頭: 別紙資料にもあるように、保護者による児童の出欠等の連絡や学校だよりなどもデジタル配信を進めていく予定なのだが、配信しても見てはいただけないのではということを考えてしまう数値ではある。だからといって、一度デジタル化したものを紙に戻すのは勇気が必要かも。先生方の集計作業の負担も考えると…難しい。

D氏: 紙ベースの保護者アンケートの方が、締切が活字で記載されているし、子どもに持たせなくてはなるので分かりやすく、自分の回答の見直しもしやすい。WEB 回答は、自分の都合の良い時間に回答できることから、締切りの感覚がなくなっていく傾向がある。紙とWEBのどちらかの選択ができるのが一番良いのだろう。WEB 回答にして最も便利になったのは集計する側であり、回答が集まりにくくなったとなれば対応すべきだし、未回答数も示しておくべきだろう。ただ、未回答も含めた分析とすると数値が落ちてしまう。そこで、回答率はこれだけで、回答したもののから分析をしていると示せばよいだろう。

E氏: 学校評価アンケートの質問内容は、1学期のものと同じ内容か?

教頭: 2学期も変わらない。同じ質問である。

E氏: いつもと同じ質問だなと思うと、特に問題がないと感じている保護者は回答の必要がないと感じ、答えなくなっているのではないか? 少し文章を変えてみると、読んでみようされるかもしれない。

ただ、統計的に文書を変えるのは良くないか？

教頭：昨年度との比較検討もあるので、基本的には昨年度とも変えないようにしている。ただし、新たな質問を加えたり、学校評価の意図に合わせて文章を修正したりすることはある。その場合でも年度途中での変更はしていない。個人的には、べ切がどうしても忘れられてしまうのかな…と。

B氏：一般企業ならば、評価の結果によって取組ややり方を変えていくのだが、教育はなかなかそのようにはいかない。しかし、この評価を受け、子どもたちの良いところは伸ばし、課題は改善していくというリアクションがないと、アンケートに答えたところで…となるのではないか？少し学校側には厳しい意見となるが、いかがだろうか？

教頭：7月に答えて、その回答が示されるのが10月ということも含めて、アンケートに答えても手応えがないということなのだと考える。自分たちの意見が、学校をよい方向に変えているという手応えがあれば…。なお、昨年度、この会においてアンケートでなく評価だということを中心に前面に出すようにとの意見をいただいた。そこで、今回からアンケートの文字を外して、学校評価で揃えている。アンケートの実施期間や改善策についても、さらに今後考えていきたい。

教頭：全ての自由記述を資料に挙げさせていただいた。確認いただき、ご意見をいただきたい。

B氏：前回、話題にも上がったスクールバスについての意見がある。いろいろ難しいことは分かっているが、特に最近は社会的な関心も高くなっている。

教頭：みんなで声を掛け合い、何とか大過なく乗れているという状況だ。

B氏：児童の下校の様子を見ていたが、学童に行く子、バスに乗る子、下校班で帰る子…先生方が教室前でいろいろと分けながら確認し、特に小さな子たちは先生が揃ったから行くかね…と声を掛けて出発している。前回の話も聞いていたから様子をうかがっていたが、あれは先生方が大変だ。さらに玄関に行けばあのおりの混雑だ。これで取り残しなどがなく乗れているというのは、先生方が気を使い、フル回転しているからだ。

教頭：時間になったら放送等で声を掛け、バス担当も乗降口に立って確認…といっても一人一人の乗車を確認することはできなくて、人の流れをみて出発の指示をしている。現状は担当が詳しい。

教務：登校はバスだが下校はクラブに行く予定になっている。しかし、クラブに行く予定だったが保護者からの迎いの連絡が急に来た…など、誰がバスに乗るのか乗らないのかを正確に把握することは難しく、できていないのが実態。担任が一番状況を分かっており、確認し教室を出してくれているはずなので、それを信じて、流れを見て指示をしている状況だ。

B氏：それでも遅れた場合は先生方が直接送っていくと…それは、大変なことだ。バスに乗るレギュラーは決まっているが、欠席や急な迎えなどで把握が難しいということか？

教頭：そういうことになる。月曜と金曜は全校が一斉に帰り、指定された座席に児童が座るので、座席表を見れば「誰がいないか？」はすぐに分かるが、火水木はそうはいかない。さらに、10月からは、県道工事の影響でバス運行時刻と経路が変更になり、より大変になった。それまでは、一筆書きで運行されていたのだが八の字を描くようになったことでより複雑になっていて…。そんな中でも、子どもたちも先生方は大きなミスなく乗っていて、有難いことだと思っている。

C氏：今度導入される、保護者連絡システムを活用できないか？

教頭：今は試行段階のシステムなので何とも言えないが、現時点では出欠連絡と配信が主のようだ。

C氏：保育園の連絡システムは、保護者が確認しやすく便利だった。保護者が連絡システムを見て、確認したかどうか保育園側が確認できていた。

F氏：しかし、小学校は保育園とは違う。保育園は、保護者と子どもが必ずセットになって動いている。小学校はそうではなく、子どもだけで動いていることも多い。来ていないが出欠連絡がないということで先生方が動いているところを見ることもある。登校だけでもこの状況なのに、下校となればさらに混乱する状況だ。児童の出欠を確認し、さらに徒歩での下校やスクールバス乗車、お迎えを把握するのは、あの状況はとても混乱しているので大変だろう。特にスクールバスは、児童が乗車しているかどうかを確認し、その責任をバスの運転手に負わせることもできないだろう。

B氏：これは、有田小だけの問題ではないと思う。有田小と同規模で、スクールバスを運行している学校はあるのか？

教頭：有田小よりも規模は小さいが、大養小と柿崎小はバスに乗車する児童数が有田小と同程度である。市教委に確認したところ、乗車確認は全て学級担任が行い、児童をバスまで引率して乗せているとのことである。多くの子がバスを利用するので問題はないようだ。児童のバスの乗車確認の仕方をどうするかということについては、ソフト的なものはどの学校にもないようである。

D氏：学校規模が違うからね。有田の場合、歩いて帰る子の方が圧倒的に多いから、そちらが優先になる。カードなどを用いて管理する方法もあるのだろうが、それは学級担任のような把握できる教員がやれば確実であるが、知らない人がやるのは難しいだろう。先程の学校や小さな学校は知っている人がやるから漏れ落ちは少ないのだろうけれど…。

教頭：先程の学校の方法であれば、乗り忘れを確認することはできるが、人手が足りないので、現実には難しいと思う。

D氏：レギュラーは決まっていて、そこから特別にいなくなる子を外していけば誰が乗るかは分かる？

教頭：そういうことになるかと思う。低学年など、連絡帳などで今日は乗らないと分かったところで黒板に表示するなどの工夫をしている。我々も、電話連絡されてきたものを随時、担任に伝えるので、誰が乗るか乗らないかは担任が一番把握していることになる。リアルタイムで変更を確認できるのであればよいのだが、ただ、発車ギリギリのタイミング電話されてくる方もおられる。その場合は電話を取ったものが直接走ることもある。

B氏：この規模の学校だと、そのようなことを管理するソフトに詳しい方もいるのではないかと？

D氏：ソフトだと入力忘れが発生するかもしれない。紙ベースで確認した方がより確実だろう。実際には把握できるのは現時点では学級担任だけであり、もし、システムをつくるとするならば、ソフトを組むよりもシールを用いるとかアナログの方が良いと思う。子どもたちのレベルアップも必要で、上級生などのバス内でのリーダーが「先生、〇〇さんいないよ！」と知らせてくれるようになれば良いのだが…。一部の子の「揃った揃った！」で出発してしまい、実際は揃っていなかったとかもあったそうだし。

教頭：ご意見は1学期末のことなので、新しいバスメンバーに慣れていなかったということもあるのかもしれない。慣れてくると、「いつもの子がいないよ」という声が挙がるかもしれない。ただ、慣れに頼るのもいかなものかとは思いますが…。

校長：スクールバスについては、子どもとしては「乗りたいのに乗れなかった」とか、保護者としては「管理上、バスに乗っている子を把握すべきだ」という考え方があるのは十分に分かるのだが、乗車人数を把握することに時間と労力をかけてもはっきりとしないという現状であり難しい。ただ、ここで確認しておきたいことは、バスでも徒歩でも迎えても、「安全に登校し、安全に下校する」ことである。まずは、学級担任が下校手段を把握した上で下校させる。仮にシステムを導入しても、児童がトイレに寄っている間に発車してしまうとかのトラブルは起こると考えるべきで、

その場合にはどのように対応するかを明確にしておく必要がある。現在は、もし乗り遅れたら歩きで帰るのではなく、先生に申し出ること。そして、職員が送り届けるということで今の枠組みでも子どもたちを確実に帰す仕組みがあります。その上で、さらに良いシステムを検討させていただきたいというのが精一杯の回答になる。

D氏：バスに乗り遅れた時の処置がとても大切であると私も考える。その時その時対応していく以外には方法はない。保護者にもご理解いただけたらと思う。

F氏：システムを導入したからといっても、物流システムではなくて生身の子どもたちなのだから様々なことが起こる。状況が変わる場合もあるのは保護者も一緒のはず。先生方には、一つ一つの問題を深刻には考え過ぎないでほしいと思う。特に若い先生方には、ベテランの先生方が励ましながら、子どもの指導にあたってほしい。

D氏：話題は変わるが、保護者アンケートの自由記述については、全てを保護者には知らせるのか？

教頭：委員の皆さんには全てを見ていただいているが、紙幅の都合もあり、回答の全てを掲載することはできない。回答を掲載する予定のものには印を付けてあるが、掲載しなくてよいと思われるものがあれば教えていただきたい。あわせて、アンケート回答率が3分の2以下に減ったことが原因かも知れないが、自由記述も減ってきている。

D氏：保護者の記述に対する学校の回答が丁寧すぎると、読みにくくて逆に言い訳に聞こえやすい。改善すべきところは、「学校としてこのようにします」とシンプルに答えてほしい。

C氏：確かに、文科省が…と答えられても、一般の保護者はピンとこないかもしれない。先生方の苦衷は察するところがあるのだが…。

教頭：言い訳がましいと思われるかもしれないが、有田小の授業時数は5年生を基準とするので1102時間であり、文科省から示されたのが1085時間。つまり、間違いなく指導が入ることを伝えたかった。さらには、月・金を5限にしている有田小でさえ超えてしまうということもお伝えしたかった。

D氏：この記述の意図はそこではないのではないかと？他の学校と同じ学習をしているのかということに心配しているのだと思う。塾などに行っているならば、他の学校の進度なども分かり、遅れているのではないかとということなのだと思う。だから、有田小では、しっかりやるべきことをやっていると伝えれば良いのだと思う。

教頭：求めていることと回答とがずれているのではという指摘だと思うので、文章をもう少しシンプルに分かりやすくすると共に、ご意見を生かして文章にしていく。

B氏：法律を守るなど言っている訳ではないからね。自分だったら、1085時間の記述も入れる。時数上限のきまりがあるのだということを示しておくべきだ。その上で、時数もそうだが内容もしっかりと意識しているということをお伝えしたい。

D氏：記述の細部を読むと「他と比べた」ということが感じられる。どこと比べたのかは分からないが、普通、他の学校の授業時数など気にしない。すると、塾などで進度に違いがあることを感じたか、あるいは学級によって差があることが話題になったのか…。ただ、「学校」という言葉があるから春日新田小などなのかな？

B氏：そこまで深読みして答えなくてもよいのではと思う。よそに比べて有田小は少なく感じるが大丈夫なのかという程度だろう。

D氏：卒業後、中学校で一緒になるが他の学校は終わっているのに有田は終わっていない…ということにならないかと心配しているのではないかと？

教頭：単元が終わらないということはない。ただ、定着しているのかと問われると、それは別かなど。

D氏：定着させるにも時数が必要ではないかと考えているのかもしれないね。

B氏：学校で起こる生徒指導上の問題に対する回答については、これ以上は難しいだろう。基本的には、「悪いことをしたら、厳しく指導してほしい」ということなのだと私は捉えているのだが。

話題が変わるが、1年ごとにクラス替えをするようにしているが、それはいつ頃からなのか？担任と子どもたちとの距離を縮めるには時間が必要であると思うのだが？厳しく指導するにも距離が縮まらなると難しいだろう。

校長：厳しく指導することについては、私も長年教員をやってきたが、叱ると逆に関係が深まったことが多かった。しかし、この学校に赴任し、児童の登校を見守っているときに道路に飛び出した子どもがいて、とっさに大声で叱ったことがあった。その後の保護者の話は「あの校長は、何もしてないのに叱る悪い校長だ。」となってしまった。とにかく頭ごなしに悪くないのに叱る人だ…子どもはそのように家で話してしまう。つまり、叱られたという嫌な経験をした。それをしたのは先生だと。これは担任に対しても同じである。「ぼく、何もしてないのに先生は叱るんだ！」と。親は子どもの言うとおりに聞くので「本当に悪い担任だ！」と「うちの大切な子を叱る悪い担任だ。」となり、事と次第では電話がかかってくる。「どうして叱ったんだ！」と怒鳴り声から始まる。

一同：(苦笑)

校長：では、どうしなければならないか。まず、本人の話をよく聞くことが始まりとなる。そして、状況を確認して、周囲の児童に聞き取りをする。その後、皆で一つ一つを確認して指導にあたることになる。そうしないと、本人も納得しないし、保護者も納得しない。一昔前なら、「それはだめだ！」と叱って「すいませんでした！」で済んだが、そのような関係をもつことができない。子も保護者も同じである。つまり、すぐに叱ることが危険な状況である。ただ、それでは先に進まないので、今回の学校だよりで、「悪いことをした場合、人を傷付ける行為をした場合には叱る」と書いた。そして、「それはあなたのためだよ」と子どもたちに伝えている。

教頭：1年ごとにクラス替えをしていることについては、統合の経緯がある。小猿屋地区の子と春日新田地区の子を混ぜて、いろいろな子に出会うように編成することに価値がある。また、生徒指導上の問題が起こるので、人間関係を配慮して学級編成を行う必要がある。全国的に見ると、2年ごとにクラス編成する学校と1年ごとにクラス編成する学校の数は半々である。有田小が開校した経緯から考えても、現時点では、1年ごとにクラス替えをするのがベストであると考えている。

D氏：校長先生が話した生徒指導上の課題については、PTA全体で話題にしていきたい。子どもを親がダメにしていく典型で、今の小学生が大人になり、子どもができるとまた同じ問題が起こる。問題が起こって我が子が指導されると、親は自分が否定されたような気持ちになる。だから、受け入れられないのだ。しかし、上手くいかなくて当然であり、その悩みを相談できずに悩んでいる親がたくさんいる。それが影響しているのだろう。これは直江津東中学校でも同じである。保護者が皆で相談して、助け合うことができることが大切だ。そして、そのことを全体の話題にすることができるのは学校や学校運営協議会ではなく、PTAだけだろう。ぜひお願いしたい。

教頭：議論も進んで来ているところだが、資料の最後に、参考として教職員による評価も挙げておいた。いろいろな捉え方、考え方をする先生がいるが、だからこそ、いろいろな子どもたちに対応できるのだと思う。向かうべき方向だけは皆でぶれずに子どもたちのためにこれからも取り組んでいく。

教頭：学校評価についてはこれで閉じさせていただく。

さて、2学期当初に別紙を配付して、学校行事、特にマラソンデーについて大きな変更を行った。当日は急な雨で中止となってしまったのだが、今のところ批判的な意見は届いていない。

校長：マラソン大会からマラソンデーにした経緯については、昨年度、実は見学者や欠席する児童が多いという実態があった。理由は「やりたくない」し、「やらされている」からであり、そうであれば「やらない」というご時勢である。さらに、無理やりやらせても、「走ることは嫌なこと」という学びにしかならない。本来、走ることは気持ちが良くて健康的なことなのに。それが6年間も積み重なっていく。それは良くないだろうと考えた。

私は「やらされる教育」よりも「やる教育」の方が良いと私は考えている。自分で選択して、選択したからには自分で目標を立てて、自分で結果を受け入れて、誰かにではなくて自分で評価して、自分で次の目標を立てる。そんな、自分で自分を成長させていく人になって欲しいと願っていて、その試みの一つと位置付け、マラソン大会からマラソンデーに変更した。

結果としては、練習時から見学や欠席する子はほとんどなく、楽しく参加できた子どもが多かったようだ。振り返りからも「自分なりに頑張った」というコメントが多く見る事ができた。

いろいろなお意見があったということは伺っている。例えば、どうなっているんだとか、なぜ無理にでも走らせないのだとか、面白味がないとか…。でも、直接、学校には来なかった。

子どもたちの受け止めは良かったのだと思う。ランランタイムを子どもと一緒に走ったが、これが結構速いペースで。適当に走っているのではないなと実感した。そして、子どもを信じるべきだと感じ、私もマラソンデーでは感動した。

B氏：私も孫が参加していて、正直ちょっと複雑な気持ちでいた。ランランを選んだのだが、一生懸命に走っていた。昨年までのことを思うと、最後に辛そうな顔で走っていた子も確かにいたなと思うと、これも一つの方法として有りだと考えている。ところで、ランランタイムとチャレンジタイムの参加比率はどうであったか？

D氏：おおよそ半々だったと聞いているよ。

B氏：どちらがよいとかではなくて、今後、統計を取っていくと、子どもたちの運動に対する意識を知る良い機会になるかも。

校長：今年はランランタイムに出たが、「これから練習して、来年はチャレンジタイムに出たい」という児童もいるそうだ。これは私たちがやらせることとは次元の違う話だと思う。よい体験をしたのだと思う。

E氏：先日家庭科の授業のボランティアに参加させてもらった。授業の様子を見て、子どもはとても良くなっているし、成長しているなど。落ち着いて授業を受けている。成長した姿を見ることができて、うれしく感じている。

C氏：来年度のPTA組織について、専門部をボランティア組織に少しずつ変えていこうと考えている。保護者が参加しやすいように、PTAのハードルを下げていきたい。このことは、保護者にも周知して進めていく。また12月5日(火)にPTA主催でお笑い芸人を招聘して、ライブを行う予定である。